助動詞「タ」について

佐　藤　尚　孝

1.　助動詞「タ」は日本語に於ける時に関する表現形式を考える上で重要な手掛かりとなる。日本語に「時制」があるか否かについては今だ定説を見ないが，少なくとも「時制」に関連をもつ可能性の高い「タ」の用法と意味が明らかにされることが先決問題である。また，外国語との比較・対照は外国語教育や翻訳の面で重要であると同時に，「タ」の意味をより明確にすることにもなる。

従来行なわれてきた「タ」についての研究は，「タ」を助動詞と考えずに動詞語尾として考えたものや，活用形別に考えず，「タ」のすべての活用形を同時に考えたものもある。本稿では，まず助動詞「タ」が他の語にいかに接続するかを考え，次に活用形ごとにその特徴を明らかにしてゆきたい。活用形ごとに考えるのは考察する範囲を分析しすぎるかも知れないが，分析しすぎたものは容易に統合できる。しかし．その逆は困難である。この方法に従って，「タ」の用法と意味を考え，その結果，「タ」がいかに時に関連をもつか，あるいはもたないかについて一考察を試みようとするのが本稿の意図である。このようにして得られた結果は，さらに外国語との比較によって「タ」の意味をより明確にするために，その外国語の特徴を考慮に入れて，分析ないし統合されて比較の効果を高めるように用いられなければならない。

2.　助動詞「タ」がいかなる意味をもっているかを考察する前に，それがどのように他の語に接続して用いられるかを考えてみたい。「タ」は動詞，形容詞，形容動詞及び助動詞の連用形に接続して，「過去」及び「完了」を表わすと一般に考えられてきた。このうち，動詞，形容詞，形容動詞についての接続関係は，「タ」がその連用形に下接することに尽きる(1)。ここで考えたいのは，「タ」がどのように他の助動詞に接続するかである。すなわち，「タ」の他の助動詞に対する上接及び下接関係である。

助動詞とは何であるかを考えることはここでは目的ではないが，「タ」との接続関係を考える上で，いかなるものが助動詞であるかを規定しておく必要がある。我国の文法学者の間で，助動詞についての定説はないようで，助動詞として考えられている語も様々である(2)。本稿では，便宜上，「国語学辞典」が助動詞として挙げているものを助動詞と考えてみたい(3)。「国語学辞典」では助動詞とその活用形が示されているが，そのうち，その型と語例のみを示すと次のようになる。

型	受身	尊敬	自発	可能	使役			希望	否定		推定	比況	推量	伝聞	指定	説明	丁寧	過去	意志	推量
語例	れ		ら	れ	せ	さ	し	た	な	ま	らし	(よう)だ	(そう)だ	(そう)だ	の	だ	です	た	よう	
	る		れ	る	る	せ	る	い	い	ん	い			だ		だ	す		う	

ここでは「タ」の文法的用法を明らかにする目的から，「タ」以外の助動詞間の接続関係については触れず，「タ」とその他の助動詞との接続関係のみについて考えたい。まず，「タ」の他の助動詞への下接について，「国語学辞典」の助動詞活用表によれば，「ん」，「まい」，「(そう) だ」(伝聞)，「う」，「よう」には「タ」に上接する形式が欠けているから，これらの助動詞には「タ」は下接しないことになる(4)。

「タ」は未然形，終止形，連体形，仮定形の4種の活用形をもっているが，仮定形は他の助動詞には上接せず連体形は体言に上接する形式であるから，未然形と終止形が他の助動詞に上接することになる。このうち，未然形の「たろ」は「う」のみに上接する。終止形に下接する助動詞は，「らしい」，「(よう) だ」，「(そう) だ」(伝聞)，「のだ」の4種類である。この4種の助動詞のうち，上に述べたように，「(そう) だ」(伝聞) 以外は「タ」に上接もする。

従って，「タ」の動詞，形容詞，形容動詞及び助動詞との接続関係は次のように図示される。

<table>
<tr><td colspan="3">動　詞
形容詞
形容動詞</td><td rowspan="5">連用形</td><td rowspan="5">タ</td><td>未然形</td><td colspan="3">う</td></tr>
<tr><td rowspan="3">動詞</td><td>未然形</td><td>れる，られる，せる，させる，しめる，ない</td><td rowspan="4">終止形</td><td rowspan="3">らしい
(よう)だ
のだ</td><td rowspan="3">連用形</td><td rowspan="3">タ</td></tr>
<tr><td>連用形</td><td>たい，(そう) だ (推量)，ます</td></tr>
<tr><td>終止形</td><td>らしい，(よう) だ，のだ</td></tr>
<tr><td>形容詞</td><td>終止形</td><td>らしい，(よう) だ</td><td colspan="3" rowspan="2">(そう) だ (伝聞)</td></tr>
<tr><td>体　言</td><td>らしい，だ，です</td></tr>
</table>

(助動詞に上接する「タ」は一般に連体形と考えられているが，助動詞に上接する「タ」が言い切りとなりうることと，終止形と連体形が同一であるため，本稿では説明の都合上敢えてこの種の「タ」を終止形とした。)

ただし，このうち，「タ」の前後の助動詞間の接続関係は他の規則に従う。「ます」及び「です」は丁寧語であり，それのみか，あるいは他の助動詞1つ(「う」あるいは「タ」) に上接して文末に用いられるのが普通である。従って，「タ」がこの2つの助動詞に下接する場合は，さらにこれに下接する助動詞はないことになる(5)。

形容動詞及び助動詞「(よう) だ」，「(そう) だ」(推量)，「だ」では終止形と連体形が異なり，助動詞「(そう) だ」(伝聞)，「のだ」は連体形を欠いている。他はすべて終止形と連体形が同一である(6)。従って，上図に於ける「タ」はそのまま連体形として体言を修飾することができる。ただし，「のだった」は連体修飾語とはならない。

3.0　助動詞「タ」は一般に「完了及び過去」を表わすと説明されている(7)。「タ」が表わすと考えられているこの「完了及び過去」とはいかなるものであるかを明確にすることは，他言語の「完了」及び「過去」との相異を明らかにするための基準となり，同時に日本語に於ける時間に関する表現の特徴を明らかにすることになる。前に述べた「タ」の動詞，形容

詞，形容動詞及び助動詞との接続関係を示した図は「タ」の未然形と終止形についてのものであるが，「タ」のその他の活用形を加えて，次に各活用形ごとにその用法と意味について考えたい。

3.1　未然形「たろ」はつねに「う」(「意志」及び「推量」の助動詞）に上接し，「う」には終止形と連体形（両活用形ともに「う」）の2形式しかないから，つねに「たろう」なる形式をとる。「う」は「意志」及び「推量」を表わすが，次の時枝誠記博士の説明によると，主語が第1人称である場合にのみ「意志」を表わす。

明日は出かけ**よう**。
と言えば，述語「出かける」の主語は，第一人称の「私」であって，「あなた」或は「彼」ではない。従って，第二人称或は第三人称の動作に関しては用いることが出来ない。
父は明日出かけ**よう**。
あなたは明日出かけ**よう**。
などとは言うことが出来ない[8]。

この説明は「う」が「たろ」に下接する場合を含んでいない。主語が第1人称であっても，「たろ」が「う」に上接する場合は，

(1)　私は出かけ**たろう**。

のように，「う」は主語（第1人称）の「意志」を表わすことはなく，「推量」を表わすことになる。論理的に考えて，すでに済んでしまった「出かける」という動作に対して主語が「意志」をもつことは不可能である。従って，「よう」，「う」は主語（第1人称）の未来の動作についての「意志」を表わすことになる[9]。

「たろ」は未来のある時に先立って行なわれたり，完了したりする動作(「未来完了」)に対して用いられない。

(2)　明日雨が止んだら出かけ**よう**。
※(3)　明日雨が止んだら出かけ**たろう**。

従って，未然形「たろ」はつねに助動詞「う」に上接し，「う」は現在時に於ける「推量」を表わすので，その時から見た「完了」ないし「過去」を表わすことになる。「たろう」が連体形として用いられる場合も同様であるが，次の例に於いて，

(4)　出かけ**たろう**筈はない。
(5)　出かけ**たろう**筈はなかった。
※(6)　父は明日出かけ**たろう**筈はないであろう。

(4)と(6)は終止形の場合と同じであるが，(5)は過去（「なかった」が示す時間）から見た過去

の動作に対する「推量」を表わしている。

3.2　仮定形「たら」は「ば」に上接するか，あるいはそれ自身で「条件」を表わす。これと「タ」を用いない「条件」を表わす表現形式と比較して考えてみたい。

(1)　昨日雨が降った**ら**家にいた。
(2)　今日雨が降った**ら**家にいるのに。
(3)　明日雨が降った**ら**家にいます。

上例が示すように，仮定形「たら」は過去，現在，未来に於ける「条件」を表わす。この3例の「降ったら」を「降れば」に置き換えても文意は変らないが，「降るなら」に置き換えると次のようになる。

(4)　昨日雨が降る**なら**家にいた。
(5)　今日雨が降る**なら**家にいるのに。
(6)　明日雨が降る**なら**家にいます。

(2)と(5)を比較してみると，(2)では「今日すでに雨が降った，あるいは，現に降っている」ことを条件にすれば，ということが意味され，(5)では，「今日これから降れば」という「条件」が意味されている。また，(6)からも明らかであるように，「降るなら」は「発話時」以後に『降る』ことを条件とすれば」という意味を表わす。

一方，「降ったら」は(1)と(2)に於いては「発話時以前」の動作を表わしているが，(3)では「発話時以後」の動作を表わしていることになる。ところが，次の例を考えてみると，「降ったら」は(1)，(2)，(3)に於いてそれぞれ，「家にいた」，「家にいるのに」，「家にいます」に先行する動作を表わしていると考えられる。

(7)　急行に乗る**なら**急ぎなさい。
※(8)　急行に乗った**ら**急ぎなさい[10]。
※(9)　急行に**乗れ**ば急ぎなさい。

すなわち，仮定形「たら」は言い切り形（文末の終止形）の表わす時間に先行する条件――「完了の条件」――を表わすものと考えられる[11]。次の例のような場合，「過去の条件」とも考えられるが，過去の事象が条件となって現在に密接に関連しているので，仮定形「たら」は「完了の条件」を表わすと考えておく方が妥当であろう。

(10)　昨日雨が降った**ら**今日の試合は中止になるところです。

さらに，次の例になると，「条件」の意味が弱まり，「完了」の意味が強くなる。

(11)　東京へ行く**なら**先生によろしく伝えて下さい。

(12)　東京へ行った**ら**先生によろしく伝えて下さい。
※(13)　東京へ**行け**ば先生によろしく伝えて下さい。

(12)は(11)に比べて「条件」の意味は弱く，「君が東京へ行くことはある程度知っているが，東京へ行ったときには」という意味を表わしている。
また，次の例では，「条件」の意味はまったくなく，純粋に「完了」を表わしている。

※(14)　駅に着く**なら**雨が降っていた。
(15)　駅に着い**たら**雨が降っていた。
※(16)　駅に**着け**ば雨が降っていた。

ここで，動詞の仮定形と「たら」との相異について少々触れておきたい。これまでの例では，(12)と(13)及び(15)と(16)に於いて両形の対立が見られる。(13)が示しているように，動詞の仮定形は「依頼・命令」を表わす文の「条件」を表わすことはない[12]。

※(17)　食卓に**着け**ば静かにしなさい。

しかし，動詞の仮定形が表わす「条件」の意味上の主語が「依頼・命令」を受ける人と同一でない場合はこの限りではない。

(18)　雨が**降れ**ば休みなさい。

また，動詞の仮定形は「完了」のみを表わすことはない。しかし，「条件」の意味が弱く，後続する動作に先行する動作を表わす場合で，「たら」よりも好んで用いられることがある。

(19)　あの人は試験を**受けれ**ば失敗する。
(20)　雨が**降れ**ば水が増す。

上例の場合，「試験を受ける」，「雨が降る」ことが後続する「当然の」ないし「必然的な」結果に対する「条件」となっている。従って，後続する結果の前に，「いつも」，「必ず」などの副詞が入ることが多い。

3.3　連体形「た」は形式上は終止形と同一であるが，終止形とは文法的機能に於いて区別される。すなわち，連体形は体言を修飾する機能をもった形式である。「タ」を使用しない連体形と次の例にて比較すると，

(1)　私が**貸す**本
(2)　私が**貸した**本

(1)と(2)はともに「貸す」という行為が過去に於いて行なわれた場合に用いられる表現である

が，その行為が現在あるいは未来に於いて行なわれる場合には(1)は用いられるが，(2)は用いられない。(1)の「貸す」という行為が過去に於いて行なわれた場合は，その行為がくり返して行なわれたことを表わすことが多い。行為がくり返えされず，単一な行為として行なわれた場合に(1)が用いられるのは稀である。

(3)　私が**貸す**本は決ってアメリカの小説だった。
※(4)　私がその日**貸す**本はアメリカの小説だった[13]。

この(3)と(4)の「貸す」の代わりに「貸した」を用いることはできるが，(3)の場合のように明らかに何度もくり返される行為を表わす場合には「貸す」を用いるが一般的であるように思われる。「くり返し」と「単一」の中間的な場合，すなわち，ほんの数回行なわれたか，あるいは，相当に長い期間を置いて行なわれた行為を表わす場合は双方の形式が同じように用いられる。

(5)　たまたまやって**くる**外来者は，……宣言されるのだった。(北杜夫，幽霊)

この例の「くる」を「きた」に代えても意味の違いは生じないであろう。
上例の「貸す」及び「くる」は瞬間的に行なわれる行為であるが，状態及び進行中の動作を表わす場合について考えてみるとさらに「タ」の意味が明確になる。

(6)　病舎から**見える**赤岳は翌日から，あのくたびれた哀しい姿をとり戻した。(遠藤周作，火山)
(7)　同じ中隊に**属する**若い兵士で，……大きな顔が，平たい胸の上に載っていた。(大岡昇平，野火)

(6)の「見える」，(7)の「属する」はそれぞれ，「戻した」，「載っていた」にて表わされた時と同時(正確に言えば，その時を含むある長さをもった時間)を表わしている。この「見える」，「属する」をそれぞれ「見えた」，「属した」に代えると，「戻した」，「載っていた」が示す時より以前に「見える」，「属する」という状態が存在したことを表わす。これは，「～している」と「～していた」についてもまったく同様である。
佐久間鼎博士が「時に関する吸着語」として説明している語と「タ」及び「タ」を用いない形式との接続関係を考えてみることは「タ」の意味をより明確にすることになる。佐久間博士は次のように分類して説明を加えている。

(一)「する」ならびに「した」につくもの（これらには大抵「しようとする」もつずきます。）
とき（に）　一般に時を示す。
ところ（を，へ，で）　場合を示す。
ころ　漠然とおおよその時を示す。
サイ〔際〕（に）　時をくぎっていう。

おり（に）　やや漠然と。
あいだ（に）　相当の長さをもつ経過時について。
おりから　「あたかもその時に」
あとから　すぐ引続いて事のおこる場合。
セツナ（に）　ごく短い時間における同時の出来事について。
トタン〔途端〕（に）
拍子に
はずみに
} 勢の赴く瞬間に事のまさしくおこるような場合。
たび（に），たんび（に）　「その時毎に」
ついでに　「それを機縁として」

㈡「する」の方につくもの
うち（に）　「している連続の時の間に」
サイチュー〔最中〕に
さなか（に）
} 「しているその折も折」
まに　「するあいだに」
やさき　「しつづけて行くまさしくそのとき」
イッポー〔一方〕に
かたわら
} 「一方では……しながら他の一方で」
そばから　「するとすぐ」
ツド〔都度〕　「するたびごとに」
まえ　「しないうちに」

㈢「した」の方につくもの
のち（に）　時間的におくれておこる事を示す。
あと（で）　「してから」，ただし独立しても使われる。
すえ（に）
あげく
} 「したのちのとどのつまりに」
トーザ〔当座〕　「ほんのその時だけ」
セツ〔節〕
ジブン〔時分〕（に）
うえ（で）　「してからの事として」(14)

㈡のうち，「そばから」と「ツド」は連体形の表わす動作や状態がくり返されることを必要とし，「まえ」はその動作や状態がもたらされる以前の時を示す。その他の語はその動作や状態が継続している時間中のある時を表わす。㈢のうち，「のち（に）」，「あと（で）」，「すえ（に）」，「あげく」，「うえ（で）」は連体形の表わす動作や状態がもたらされた以後の時を表わす。「セツ」は「広辞苑」では「おり。ころ。とき。」と説明されているから，元来は㈠に属するものであろうが，現在では「した」のみに下接するようになったものと考えられる。「ジブン」（に）」は㈠に属するものと考えられる。すなわち，

(8)　あの人が駅に**着く時分に**は雨が止んでいるでしょう。

(9) 桜の**咲く時分に**よくその辺まで歩きました。

などは一般的に用いられている表現であるからである。(二)の「そばから」は「するとすぐ」と説明されているから，「連体形の表わす動作が完了した直後に」と解釈される。ところが，

(10) **作くるそばから**こわす。
(11) **蒔くそばから**からすがほじる。

のように「そばから」は「するとすぐ」という意味をもつ以外に，連体形が表わす動作が何度もくり返えされることを意味する。

また，名詞ではないが，格助詞の「まで」や連語の「までに」は(二)に含めてよいと考えられる。

(12) ここに**赴任するまで**須田仁平は火山について……関心もなかった，(遠藤周作，火山)
(13) 君が**来るまでに**終っていた。

「タ」は「までに」に上接することはないが，「まで」に上接することは特別な場合にはある。すなわち，次の例のように，「動作が完了した時に至るまで」という意味を強調する場合である。

(14) プールに**飛び込んだまで**はよかったが。

無論この場合でも「飛び込むまで」と言えるが，(14)の方が「飛び込むという動作が完了したときまで」という意味を明確にする。

(一)に属する語のうち，「とき（に)」について考えてみたい。

(15) あたりを**見まわしたとき**，……気がついた。(北杜夫，幽霊)
(16) 花瓶を手に**支えた時**，……眩暈を感じた。(遠藤周作，火山)

この2例に於ける「タ」は単一動作の完了を表わしている。単一動作ではなく，超時間的な及びくり返し行なわれる動作を表わす場合には次のように「タ」は用いられないのが普通である。

(17) それが太陽と私の間に位置を**占める時**，ことによく光った。(大岡昇平，野火)
(18) 書きものを**するときに**だけ，角ばった縁なしの眼鏡をかけた。(北杜夫，幽霊)

(17)，(18)では「占める時」と「光った」，及び「するとき」と「かけていた」がそれぞれ同時であることが示されている。あるいは，少なくとも時間的に前後関係があることは示されていない。何度かくり返された動作であっても，それがそれ以前に完了してしまった時を明確に示す場合には「タ」が用いられる。

(19) 空に虹が**かかったとき**よくその山に登った。
(20) 港に客船が**着いたとき**は街は賑やかになった。

また，状態や進行中の動作を表わす場合も同様に，「～ている」の方が「～ていた」よりも多く用いられるようである。

(21) この試みは特に気の**めいっているとき**，……一層成功するようだった。（北杜夫，幽霊）
(22) 当然なことを話し合ったり**しているとき**は，この冷静さの破れる気遣いはなかった。（伊藤整，青春）

しかし，過去時を明確に示す表現があるときは「～していた」が用いられることもある。

(23) **さっき**百枝さんが**いたとき**，……かえってこの絵を信じる気になったね[15]。（伊藤整，青春）
(24) **こないだ**君と**話していたときは**，……性格をうつせばいいと思っていたんだ。（同上）

「～ている」が用いられない場合でも，次の例のように進行中の動作を表わすことがある。

(25) バスが軽石の埋まった斜面を**登る時**彼はそっとデュランを盗みみした。（遠藤周作，火山）
(26) 後ろ向きになって襖を**閉めるとき**，牒め合わせたようににこっと信彦に笑った。（伊藤整，青春）

(25)，(26)に於ける「登る」，「閉める」はその動作が進行中であるか，あるいは今だ完了していないことを表わしている。この場合に「タ」を用いるとその動作が完了してしまったことを意味するから，(25)，(26)の文意が変わる。

連体形が修飾する名詞のうち，「ため（為）」(「ために」になることもある）は特殊である。「タ」を用いた連体形と用いないものでは「ため（に）」の意味が変わる。

(27) 彼女たちは今私の臨終を**見届けるために**，ここに現われたように思われた。（大岡昇平，野火）
(28) 私は足を**負傷したため**，運動会に参加できなかった。

(27)は「目的」を表わすが，(28)のように「タため(に)」となると，つねに「原因・理由」を表わす。ただし，「タ」を用いない場合でも原因・理由を表わすことはある。

(29) 明日は故郷へ**帰るため**，ピクニックには参加できません。

これは，前に述べた未然形の「たろ」が「う」に上接すると「う」はつねに推量を表わすこ

とに似ている。すなわち，すでに済んでしまったことに対して，それを目的とすることは論理的に不可能であるからである。

最後に「タ」を用いた特殊な連体形について考えておきたい。橋本進吉博士は，「壁にかけた帽子」，「尖った山」，「親に似た子」などの表現に於ける「タ」を普通の助動詞と同様に扱い，「てある」，「ている」のような意味をもち，動作が完了してその結果が残っていることを表わすと説明している(16)。時枝誠記博士は，このような「タ」の用法はすべての動詞にあるわけではなく，「走った犬」，「泳いだ魚」，「読んだ人」に於ける「タ」の意味とは異なるとして，このような「タ」は存在・状態を表わす接尾語であると説明している。時枝博士は「かけた」，「尖った」などを連体詞と呼んでいる(17)。「壁にかけた帽子」については，過去に於いて「壁に帽子をかける」という動作が完了した結果，現在（正確に言えばその文の主動詞の表わす時間）でも「壁にかかっている帽子」というように分析できるかも知れない。しかし，「尖った山」や「曲った道」などについても同様な考え方をするのは無理であり，この「タ」は今まで述べてきた「タ」とは異なる性質のものである。橋本博士のように，助動詞「タ」の特殊用法に含めるか，時枝博士のように連体詞を構成する接尾語であると考えるか，あるいはまた動詞の態のうちの一つに含めて考えるかである。筆者は論旨の都合上，ここでは時枝博士の考えに従って，この種の「タ」を助動詞に含めないでおきたい。

3.4　終止形には文末に用いられる場合と，ある助動詞に上接して用いられる場合の 2 つがある。このうちまず文末に用いられる「タ」について考えてみたい。助動詞「タ」の用法と意味について述べた一般の文法書では「過去」と「完了」の用法として用いられた終止形の「タ」を含む用例を挙げているが，次に橋本進吉博士の用例を一部掲げる(18)。

過去：むかし，おじいさんとおばあさんがありました。
完了：あゝ，こゝにあった。（「見つけた」意味，「二三前年はこゝにあった」とはちがふ）

橋本博士はこれに「普通の命令より，すこしやわらかく聞える命令」として次の例を挙げている。

(1)　ああ来た。
(2)　一寸まった。
(3)　おつと待ったり。

国広哲弥氏は「タ」の意味と用法をさらに詳しく次の 9 種類に分類している。（ここでは用例は省き，必要なもののみ後に引用する）

1)　「過去における動作の完了あるいは過去のある期間継続した状態を表わす」
2)　「過去における習慣的くり返しを表わす」
3)　「過去においてある条件のもとで起こった」
4)　「過去に実現した状態が現在まで継続している」
5)　「ある状態が過去から現在にわたって継続していることに今気が付いた」

6)　「過去において確定していた未来の行事・計画を発話時に思い出した」
7)　「過去から現在にわたって当てはまる事柄を話者あるいは相手自身は承知していることを暗示しながら，相手にその確認を求める」
8)　「実際にはまだ実現していない動作・状態を確実に実現するものとみて先回りして実現した（も同然）と宣言・承認する」
9)　「命令形よりやや間接的であるが，かなり粗野な命令」(19)

国広氏は「テンス」について考察している中で上記の分類を行なっているので，文末に用いられる「タ」（感動を表わす助詞が下接する場合もある）について考えている。
この分類を橋本博士のものと比較すると次のようになるであろう。

橋　本	国　広
過　去	1)，2)，3)
完　了	1)，4)，5)
命　令	9)
	6)，7)，8)

国広氏の分析は，「タ」のみではなく他の語句に依存しているものがある。1）の「過去のある期間継続した状態」は用例から判断して分析してみれば次のようになる。

(4)そのひとはしばらくここに**いました**か。

{「過去の」＝「タ」の意味} ＋ {「ある期間を継続した状態」＝「しばらく」及び「います」の意味}

2)の「習慣的くり返し」という意味は次の2例に於いてそれぞれ，「よく」，「いつでも」によって表わされている。

(5)　あの時もさ，君はよく指を**切った**ぜ。
(6)　あなたはちっとも私にわるいことをなさらなかったじゃありませんか。あなたはいつでも私に力を**与えてくださいました**わ。

3)の「ある条件のもとで」という意味は次の2例に於いてそれぞれ，「空腹を感じると」，「人がちょっとでも悪口を言うと」によって表わされている。

(7)　原始人は，**空腹を感じると**，いつどこでも，手づかみでナマの物を**食べた**。
(8)　そのくせ**人がちょっとでも悪口をいうと**すぐ**食ってかかった**。

6)，7)，8)は注目すべき用法である。6)は5)に近い用法と考えられるが，6)は現在時に於いて「話者が思い出す」という行為が完了したことを表わし，思い出す内容は過去，現在，

未来のいずれの時間に属していても構わない。7）は「過去を表わす用法」に近い。過去時に於いて話者及び相手が知ったことに対する確認を表わしているので，「タ」は感動を表わす助詞（これが確認を表わす場合が多い）を伴なうことが多い。6）は「完了を表わす用法」に属するものであるが，未来時に於ける完了であり，その意味で，ほぼ確実であると話者が断定した場合に用いられる。従って，基本的には6），7），8)は「過去」及び「完了」から派生した用法と考えられるが，1)～5）の場合とは異なる用法と考えておくべきであろう。しかし，6），7），8)はあくまでも派生的な用法であることと，これらの用法は話言葉に限られていることを兼ね合わせて考えてみると，文末に用いられる終止形の「タ」は発話時と密接な関係をもった「過去」及び「完了」を表わすものと考えられる。

国広氏は以上の分析から「タ」の時間的言及は過去，現在，未来にわたっていることと，仮定形が用いられている３例を示して，「未来に於ける実現」を表わすことを理由にして，「タ」は積極的に発話時と関連をもっていないと考えている[20]。筆者は，文末に用いられる終止形は他の活用形とは異なって，発話時と密接な関連をもつものと考えている。他の活用形はそれぞれに考えてみる必要があろう。

次に，他の助動詞に上接する「タ」の終止形について考えてみたい。前に述べたように，終止形「た」が上接する助動詞は「らしい」，「（よう）だ」，「のだ」，「（そう）だ」（伝聞)の４つであり，「そう）だ」以外はさらに「タ」が下接もする。ここでは次の形式上対立する２組の表現について考えたい。

(A)　ルらしい[21]：タらしい
(B)　ルらしかった：タらしかった
（他の助動詞についても同様）

(A)の「タらしい」に於ける「タ」は明らかに「ル」と対立して「過去」ないし「完了」を表わす。これは文末にある「らしい」の示す時間が現在時であるからである。次に１例を挙げる。

(9)　ぼくはどうやら眩暈して**しまったらしい**。（北杜夫，幽霊）

従って，当然ながら「（そう）だ」（伝聞）は「タ」に上接しないから，「タ」がこれに上接する場合は，つねに「過去」ないし「完了」を表わすことになる。

(10)　彼は**優勝したそうだ**。
(11)　彼の家はやっと**完成したそうだ**。

(B)の場合は文末の「タ」が「過去」を表わすのが普通である（「らしかった」，「ようだった」，「のだった」が「完了」を表わすことはまずない）から，「らしかった」に上接する「タ」はその時点(過去)に於ける「過去」（大過去）ないし「完了」(過去完了)を表わすこととなる。

(12)　声なき音楽が，彼らのうなだれた頭の上を**渡るらしかった**。（大岡昇平，野火）

この「渡る」を「渡った」に置き換えてみれば明らかであろう。「渡ったらしかった」とす

れば，過去に於ける「らしい」の表わす推定は，それ以前に，あるいはその寸前に生じたであろうことに対してなされているのである。「(よう) だ」についても次の2例が示すように同様に考えてよかろう。

(13) 冷気が……次第にぼくを目ざまして**ゆくようだった**。(北杜夫，幽霊)
(14) ぼくは幾何かの時間を倒れて**いたようだった**。(同上)

説明の助動詞「のだ」についても基本的には上述した用法と同じであるが，この助動詞は特殊な意味をもっていて，一部上述した用法と異なるところがあるから考えてみる必要がある。

(15) 彼はうるさくなると，いつもこの笑顔の中へ**逃げ込むのである**。(伊藤整，青春)
(16) ほとんど痛みにちかい慄えが**走りすぎたのである**。(北杜夫，幽霊)
(17) 床はおじけたように銹びた軌りを**たてるのだった**。(同上)
(18) 火口に溜ったガスによる爆発であることが**判明したのだった**。(遠藤周作，火山)

(15)，(16)，(17)は上述した用法と同一であるが，(18)は異なる，すなわち，「のだった」が示している過去時以前に「判明する」という行為が済んでいた，ないし完了したと解釈することは困難であり，「判明した」と「のだった」は同時を示すと考えるのが妥当であろう。「判明する」という行為が「のだった」以前に行なわれた場合には，「判明していたのであった」という表現を用いるのが普通であろう。そう考えると，(17)と(18)の区別がつかなくなる。

ここで少し「のだ」の用法と意味について考えておきたい。「国語学辞典」では「説明の助動詞」(これを助動詞として扱っていない文法書もかなり多い[22])として挙げられている。この「説明」とは話者が自らの存在を明示した立場から相手に積極的に訴えるために行なう説明である。「のだ」(及びその類形) がもっとも頻繁に用いられるのは演説や自己主張を強く表現する論文，論説などに於いてであり，発話者 (ないし筆者) の存在を明確にしない新聞や雑誌の事実報道に於いてはほとんどまったく用いられない。小説に於いては，時折混ぜ込まれているのが普通であり，一般に小説の語り手は自己を強く主張することはないが，文体上の単調さを避けるために時々「のだ」を用いることによって読者に対して積極的に「説明」しかけているものと考えられる。また，「のだ」を欠いている表現でも説明は十分にされているわけであるから，この助動詞のもつ意味は「話者の相手に対する積極的な意志」であると考えられよう。

従って，(16)は過去の出来事を相手に伝える話者の積極的な意志が現在時に於いて表わされているのであり，(17)ではその意志は，話者が出来事の生じた時間 (過去) に入り込み，その時点から相手に働きかけているのである。(18)では意志の働きかけは(17)と同じであるが，出来事が過去時に於いて生じたことを(17)よりも強く表わしているように考えられる。(17)が相手を過去へ引き込んで，出来事の生じた時間をあたかも現在時であるかのように伝えるのに対して，(18)は相手を過去へ引き込むが，やはりそれは過去であることを明示した上で伝えているように考えられる。

従って，(18)の例に於ける「のだった」に上接する「タ」は他の助動詞に上接する「タ」及

び(9)の「タ」の用法とは区別して例外として考えるべきであろう。

4. 以上述べてきた「タ」の用法と意味の中で，「完了」という語をくり返して用いてきたが，ここで，今まで用いてきた「完了」には2つの意味があることを明確にしておきたい。1つは「現在完了」であり，発話時と関連をもった，すなわち，発話時に於ける完了である。他方は発話時とは関連をもたない完了であり，どの時点に於ける完了であるかは，発話時によって決定されるのではなく，文末の動詞ないし助動詞の示す時間によって決定されるのである。「過去」についても同様に2つの「過去」が考えられ，「タ」の意味について考える場合には，発話時から見た「過去」と，文末の動詞ないし助動詞が示す時から見た「過去」を考慮すべきである。

ここで，今まで考えてきた「タ」の意味を，時間的な関連を視点として，整理すると次のようになる。

		未然形	仮定形	連体形	終止形（言い切り）	助動詞に上接する終止形
発話時からみた	過去	×	×	×	○	×
	現在完了	×	×	×	○	×
	現在	×	×	×	△	×
	未来	×	×	×	△	×
文末の動詞ないし助動詞の示す時からみた	過去（以前）	○	×	○	×	○
	完了	○	○	○	×	○
	現在（同時）	×	×	△	×	△
	未来（以後）	×	×	×	×	×
特殊な用法				連体詞	命令	

（本稿では，前に述べたように，連体詞を連体形と区別し，その語尾を助動詞「タ」として考えない。しかし，連体詞を連体形として扱う場合には，△印を入れた枠に含めてよい。ただし，その意味で△印を入れたのではなく，一部の連体形にはこの用法があるからである。）

上表が示すように，発話時と関連をもつものは終止形（言い切り）のみである。他はすべて文末の動詞ないし助動詞によって決定される相対的な時間を表わす(23)。換言すれば，文末の時間指示がなければ単独ではどの時間に属するかを決定できないのである。上表の終止形（言い切り）の欄では2つの枠（発話時と関連をもつ「現在」と「未来」）に△印を入れた。この枠に属する「タ」の用法は前にも述べたように，限られた用法である。

最後に，以上のことから，日本語と英語を比較する場合の「タ」の扱い方の一方法を提案してみたい。英語の動詞及び助動詞には「過去時制」及び「現在時制」（動詞には「未来時制」も考えられる）があり，日本語の用言の活用とはまったく異なる方法による活用形がある。日本語の活用とは，英語のように，人称，数，時，法によって形を変化させることでは

なく，用言が他の語に接続したり，それ自身で終止したりする場合に起こる語形変化である。従って。構造，体系の著しく異なる両言語を比較することは極めて困難ではあるが，「タ」に関する限りでは少なくとも次の3種類の比較が可能であり，かつ，必要であろう。

1. 相対的な時に関連をもつ「未然形」，「連体形」及び「助動詞に上接する終止形」と英語の準動詞（不定詞，分詞，動名詞）との比較。
2. 「仮定形」と英語の「仮定法」との比較。
3. 「終止形（言い切り）」と英語の「過去形」及び「現在完了形」との比較。

無論この3種類の比較は必要なものではあろうが，十分なものではない。両言語は，統辞法，話法に於いても著しく異なっているので，これらの視点からの比較も当然行なわれなければならない。本稿では，比較のための基礎として，「タ」を分析して考えたが，実際の比較は機会を改めて考察してみたい。

〔注〕

(1) 形容詞，形容動詞は3種，4段活用動詞は一般に2種の連用形をもっている。そのうちの1種に「タ」が下接する。
(2) 金田一春彦「日本語・文法」(『世界言語概説（下巻）』研究社，1971) pp. 187-188. 参照。
(3) 国語学会編「国語学辞典」(東京堂，1972) p. 1033.
(4) 同上
(5) 「行きましたです」のような表現は極めて稀な例と考えられる。
(6) 時枝誠記博士は「終止連体形」という活用形を立てることも妥当であることを示している。「日本文法口語篇」(岩波書店，1972) p. 107.
(7) たとえば，橋本進吉「助詞・助動詞の研究」(岩波書店，1970) pp. 347-348. 時枝誠記『前掲書』pp. 198-201. など。
(8) 時枝誠記『前掲書』pp. 202-203.
(9) 橋本進吉『前掲書』p. 388. では「う」，「よう」は「未来の助動詞」となっている。
(10) この文は別の特殊な意味で用いられることはある。
(11) これに関しては，久野暲「日本文法研究」(大修館，1974) pp. 109-113. に興味深い考察がある。
(12) 従って，(9)の文は2つの点で非文法的な文と言える。次の例に見られるように，形容詞の仮定形にはこの用法がある。
　寒かっ**たら**セーターを着なさい。
　寒け ればセーターを着なさい。
(13) この文は，その日に何冊かの本を何人かの人に貸した場合（これも「くり返し」に属する），あるいは「貸すことになっていた（過去未来）という意味を表わす場合には用いられるであろう。
(14) 佐久間鼎「現代日本語法の研究」(厚生閣，1967) pp. 340-342.
(15) この「いた」も「ていた」と同様に扱ってよいであろう。
(16) 橋本進吉『前掲書』p. 348.
(17) 時枝誠記『前掲書』p. 199.
(18) (16)に同じ。
(19) 国広哲弥「構造的意味論」(三省堂，1967) pp. 64-68.

(20) 国広哲弥『前掲書』p. 68 に次の 3 例が挙げられている。
来年受けて**だめだった**ら，来来年受けるさ。
もし食べて**苦かった**らお捨てなさい。
あした雨が**降った**ら中止です。

(21) 「タ」を用いない用語の終止形を仮に「ル」にて表わす。

(22) 金田一春彦『前掲書』p. 189 では助動詞として，次のように説明されている。
ノダは，動詞・形容詞の連体形につき，元来，“事態ハ……ト説明サレル”というような意味をもつ。
（例） 彼ワモー抵抗シナカッタ。諦メタ***ノダ***。
しかし，転じて，断定その他種々の話し手の気持を表わすのにも用いられる。
（例） ボクハドーシテモキョー行ク***ノダ***。（決意）
モーオ前ハ帰ル***ノダ***（命令）

(23) 金田一春彦『前掲書』p. 176. でも「終止形（言い切り）」とその他の形式が区別され，「次に述べられる事柄あるいは話している時より以前であることを表わす。」と説明されている。

Summary
On an Auxiliary "Ta"

Naotaka SATO

Since an auxiliary "Ta" has much to do with the expression of time in Japanese, we must make clear the usage and meanings of "Ta" in order that we may know the temporal features in our language. "Ta" is generally described in Japanese grammar as an auxiliary expressing *past* or *perfect*. So it is quite necessary to compare the *past* and *perfect* with *the past tense* and *the perfect tense* in such a foreign language as English, and to find out the similarities and dissimilarities between them.

In this paper, the author firstly tries to describe the conjunctive system of "Ta" and other words having conjugations. Secondly he researches the meaning of each inflection of "Ta" for the purpose of defining the kind of *past* and *perfect* expressed by the auxiliary, and preparing for a comparison between "Ta" and the English equivalents.